

踊りの「巧」と「美」

—バレエの場合—

Perfect Body and Technique in Dancers

1 素材としての身体加工

加工対象が外部にない踊りの場合は、「匠」よりは「巧」の字をあてる方がふさわしい。もっとも祭祀舞踊に先立つ齋戒沐浴や、プロダンサーの身体矯正も一種の身体加工過程とみなすことができる。しかしそれは、あくまでも素材づくりの段階にすぎず、踊りの「巧」さは、特定の「場」と「時」を得て、はじめて発揮できる四次元の現象だからだ。

踊りのうちでも身体加工システムの完成度が高いものにバレエがある。訓練のメソッドは200年以上前にできあがり、現代もダンスだけでなく体操・フィギュアスケートをはじめ多くの表現スポーツ系の基礎訓練としてとりいれられている。バレエにおける身体加工、つまり身体矯正の成果は、ダンサーの真っ直ぐのびた体軸、肩関節の下制、股関節の外旋といった骨格系の特性と(図1)、極端な痩身にあらわれている。股関節の外旋によって、大腿骨頸と関節窩の位相がずれ、その結果、可動域とくに外転域と伸展域が増し、さらに大腿から爪先まで真っ直ぐのびた下肢ラインを強調する効果を生む。また、痩身は表現における天上志向性を充足させる(痩身への過酷な闘い、たとえば極端なダイエット、下剤や自己誘発性嘔吐の乱用については、拙訳「妖精との競いあい」大修館を参照されたい)。

2 バレエ技法の「巧」

(1) バランス系 バレエテクニックは大きく、バランス系・回転系・跳躍系にわけられる。このうちすべての

基本になるバランス系は、アラベスクやアテチュードなどを含む技法で、爪先という最小の接地面でのポーズ維持が求められる。これは身体の質量中心が接地面上に来るように、身体各部を意識的にふりわけ調整することで可能になる。うまくいった時は、<コロンブスの卵>のような力の“ぬけた”感じ、いくらでも維持できそうな“きまった”感じがあり、トレーニングによって身体意識とくに体軸感が形成されてはじめて可能になる。身体意識についてさらにつけ加えると、下肢を曲げるときは引き伸ばしを、腕を開くときは中心軸への凝集をというように、つねに相反するベクトルを意識的に調整する点も大きな特徴といえる。ダンサーの体軸感に対し、日本の伝統舞踊



森下はるみ

Harumi Morishita

1932年4月生まれ

1963年東京大学大学院人文科学研究科(体育学専攻)修了

■主として行っている業務・研究

- ・ひとの身体表出特性
- ・ひとの適応能の年齢変化

■所属学会および主な活動

比較舞踊学会(会長)、ヒトと動物の関係学会(評議員)、バイオメカニズム学会など

■勤務先

お茶の水女子大学 名誉教授

(〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-16-2-918, 自宅)

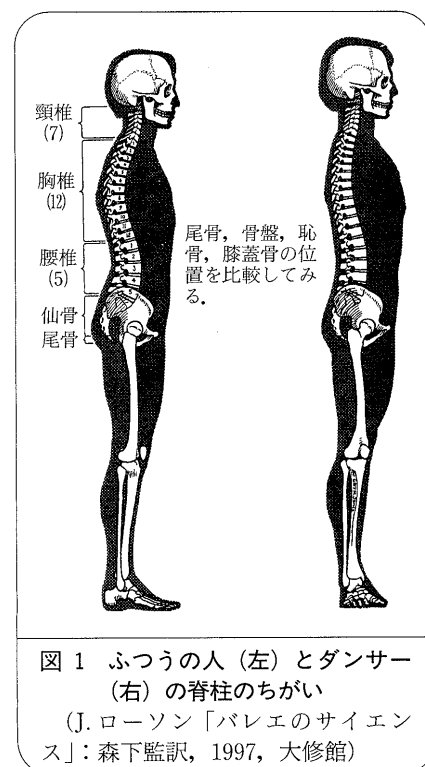


図1 ふつうの人(左)とダンサー(右)の脊柱のちがいを比較してみる。

(J. ローソン「バレエのサイエンス」: 森下監訳, 1997, 大修館)

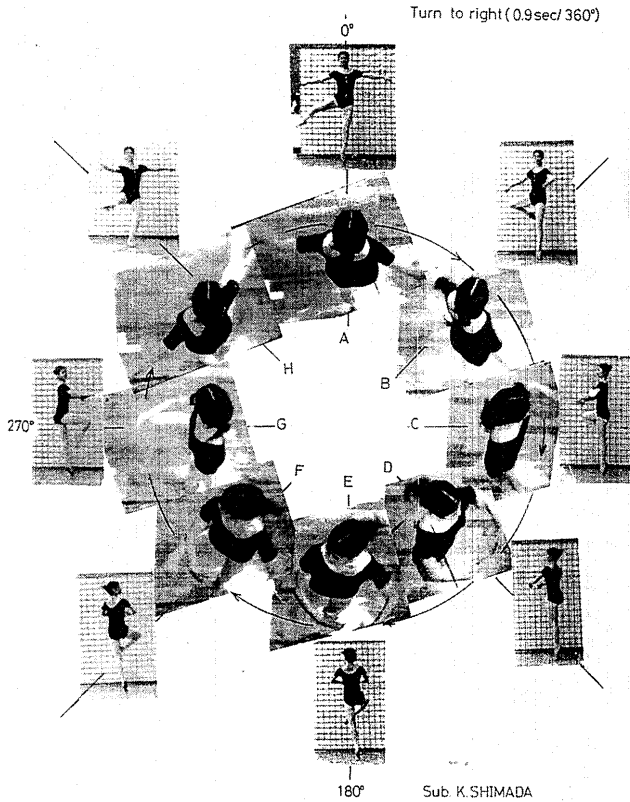


図 2 Grand Fouette

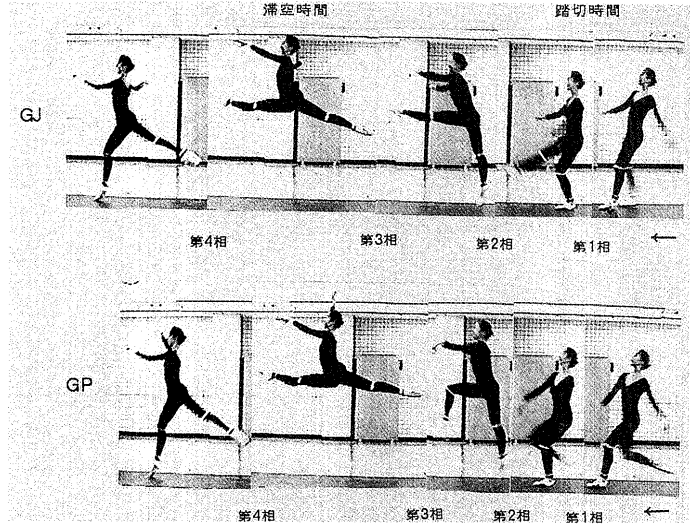


図 3 上級者におけるグランジュッテ (上) とグランパドシャ (下)

表 1 跳躍初速度との関連項目

	減速 (cm/sec)	跳躍角 (度)	合成速度 (cm/sec)	移動距離 (cm)
初・中級群-GJ	39.8	29.9	334.2	182.3
初・中級群-GP	31.1	38.7	342.8	188.8
上級群-GJ	49.1	38.7	266.7	142.8
上級群-GP	57.1	42.9	291.6	148.3

の場合は、上体はまっすぐ引き上げたまま、一方床反力を吸収させるために下肢は屈曲のまま移動する。そこで、バレエにおける頭頂から爪先までの体軸の一本化に対し、能や日本舞踊では腰を不動の座とし、そこを境にからだ使いが上下に二極化される。「強身動有足踏、足強踏身宥動」(身を強く動かす時は足を軽く、足を強く踏む時は身を静かに)という世阿弥の「巧」さの極意がそのまま生きている。

(2) 回転系 バレエの回転技法には、「白鳥の湖」第二幕でオデールが演じる32回転(ダブル回転をする場合はもっと多い)のフェテのように位置移動のないものと、舞台を斜めや半円を描きながら回転するものがある。ポアントした足は回転に有効に働くが、身体調整から見ると先にのべた体軸の垂直維持と、回転加速度による眼振の抑制が「巧」さを左右する。図2

はフェテを上から示したもので、頭部と体幹の回転位相にずれがあり、視覚の固定相を増すことで眼振を抑制している。このさい頭部が体幹回転に先行する動きは反射的になされるが、逆の体幹が先行する相は意識的なトレーニングによって始めて可能になる(舞踊における回転動作の研究、森下・山本、体育の科学、23-4, 5, 1973)

(3) 跳躍系 垂直方向にしろ水平方向にしろ、バレエの跳躍技法は、空中での浮遊性表現にある。図3は2種類の水平方向の跳躍(グランジュッテとグランパドシャ)および身体各速度を示したものである(表1)。上級者では離地時の減速と合成速度がむしろ少なく、この点が高さや距離を競う跳躍との大きな違いになっている(舞踊における前後開脚系跳躍の動作特性; 亀山・森下、バイオメカニズム13, 1996)。未熟者ではスポーツ系の特徴

がよりはつきりとみられる。

踊りの「巧」と「美」

スポーツの「巧」さはCGS単位や得点で表すことができる。しかし、踊りの「巧」さは、観客の印象とダンサー自身の身体感・運動感によってきまり、この点は体操など判定競技に似ている。ここでは99%の完全な演技も、最後の着地の失敗でパーになることがある。また、ロボットのピアノ演奏がいかにかせいで、ロボット工学の人は別としてだれも聞きにゆかないように、人間行動に潜在するある種の不確かさ・未確定な要素が、聴衆の緊張感と期待とく場との共有感を生む。いいかえれば、踊り手のテクニックだけでなく、序から結までの一連のく文脈くと、存在そのものの未確定さを先取りした充足度が、踊りの「巧」と「美」を最終的に決定するといえる。